月百景

望遠鏡で楽しむ月文学

020

三日月　黒く巨大な危難の海

「星よりも　ほのかなものは　みどり児のほほえみ　ついたち二日の月」（北原白秋「月光微韻」）

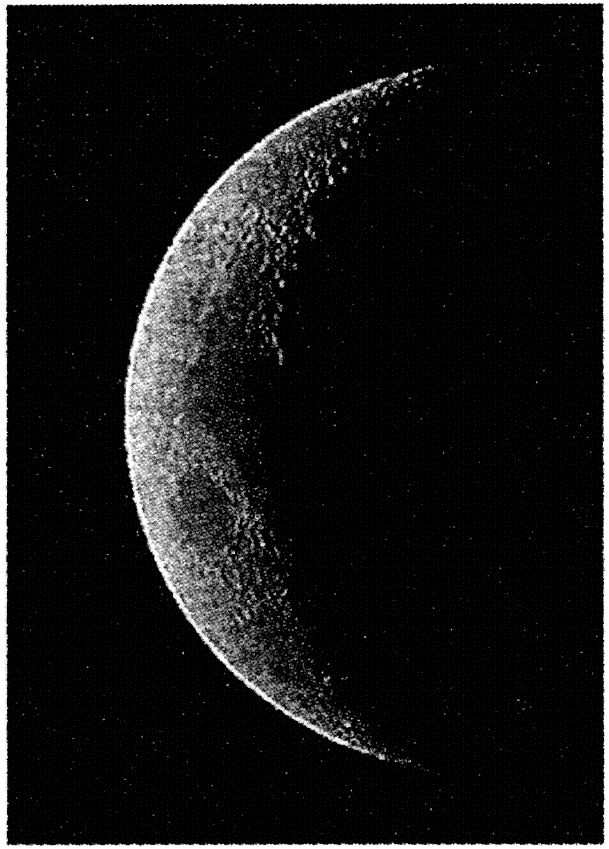
恋多きロマンチストの白秋が結婚し、子どもが生まれて三カ月。生まれて間もない乳飲み子の生命力に満ちあふれた姿を、まだ細いが日増しに満ちていく月に、たくみに重ね合わせている。

大正十一年六月のある月夜、海の見える書斎で突然この感興がわいたという。

細長い三日月の真ん中には、巨大な黒っぽい円形の低地がみえる。危難（きなん）の海だ。天体が衝突してできた巨大なクレーター。そこへ地下からマグマが流れ出してできた。

三日月へ向かって満ちていくにつれて、この平たんな低地に朝の光が射し込んで私たちに素顔を見せてくれる。

（文・川上紳一、カメラ・白尾元理＝写真家）



三日月にやや黒ずんだ危難の海（中央）がほのかに浮かぶ